



社会的人間論の基本的諸命題：
富永健一「社会体系分析の行為論的基礎」の批判的
検討を介して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 吉崎, 祥司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00002578

社会的人間論の基本的諸命題

—— 富永健一「社会体系分析の行為論的基礎」の
批判的検討を介して ——

吉 崎 祥 司

はじめに

社会学の理論的課題が、歴史的に「個人と社会」問題の解決を軸に推移してきたことはいままでもない。社会学における「社会的人間」論はこの課題に答えることを主題として、もともとはともかくも「社会的存在」としての人間（人間の社会的存在性）を強調する立場から立論されたものであったといつてよからう。たとえば、周知のパーソナリティ——社会化という把握がそうであり、生物個体として生まれパーソナリティとして成長する人間にあって、そのパーソナリティの形成は社会化、すなわち個人が文化——価値や規範、制度——を内面化していく過程によって達成される、という形で社会的人間論が典型的に成立している。そして、ここではひとつの既成性（Positivität）としての社会の側にパーソナリティが収斂され、そのようなものとして社会の本質が指定されて、そこから社会学理論が基礎づけられているとするならば、近時しかしながら、同じく「社会的人間」論の名のもとに、人間存在の社会性が「強調されすぎる傾向」¹⁾に対する批判とそこからの新しい試みがさまざまに提示されてきている²⁾。それらの試みが共有する志向は、諸個人の主体的能動性にもとづく自由な自己実現という契機に着目し、社会的個人を人間的な欲求と行為とから再構築しようとするところに存する、と概括することができよう。こうして今や、社会的人間論という同一の土俵上で、社会学的な人間把握のふたつの傾向（ただし、それらは必ずしも社会学史を二分するあの潮流の謂いではない）が対峙するにいたっている。浜島朗は、そうした問題状況を次のように要約している。

「〔主体的・能動的行為主体の理論的定礎のためのさまざまな努力にもかかわらず——引用者〕しかし、パーソンズにあって、行為主体としての人間をつきうごかす欲求そのものから出発して社会システムをとらえるよりは、システムの均衡維持という大前提から出発して人間の欲求や行為を操作可能なものにすりかえ、人間と社会とを同質化しているため、そもそものはじめから人間と社会（あるいは欲求と期待）との対立といった把握観点は稀薄であったといえるのである。というのは、こうである。かれのばあい、人間と社会または欲求と期待との同質化は、文化（価値・規範・制度）に媒介されている。共通の価値や規範の社会システムへの外在化（＝制度化）とパーソナリティ・システムへの内面化（＝社会化）をつうじ、つまり共通価値の分有をつうじて、人間の欲求や行為は相互行為状況にはたらく〈期待の相補性〉ないしは〈相互的役割期待〉へと変換され、さらにはそこから発するサンクションや社会制御によって水路づけられ社会システムの内部へと矛盾なく統合されることになるからである。したがって、パーソンズのとらえた人間とは、行為の主体でも変革の主体でもなく、操作と社会化の結果、社会のがわからの期待にそって意識的にか無意識的に同調行動をとる柔順で受動的な人間なのである。人間はその欲求と行為もろとも、期待された

役割に還元されるか凍結されて、社会システムのなかに組みこまれ、そこに去勢されたままくりつけられる。このような過度に社会化され同調する人間の姿は、じつは現代の管理社会的状況下で疎外と抑圧を身にこうむる役割人間・制度人間・組織人間の姿にほかならない。そこにあるのは、過剰同調というよそおいをまとった過剰抑圧の世界であり、矛盾のない秩序世界なのであって、それが管理社会的〈統合〉の素顔なのである。だが、こんにち必要とされているのは、〈人間の社会化〉ではなく、〈社会の人間化〉であろう。』³⁾

社会学におけるこうした状況は、じつは、ひとり社会学にとどまらず現代の社会科学諸分野を貫く普遍的問題性である。そして、浜島のいうパーソナルな「人間の社会化」にたいする「社会の人間化」を実践的・理論的課題として引き受けようとするマルクス主義もまた、或る意味でこの種の状況を必ずしも免れていない。もとより、伝統的な意味での社会学における問題連関とマルクス主義社会理論におけるそれとは、決定的に理論的性格を異にするところがあり同日に論ずることはできないが、たんに外見的な相似ということにとどまらない或る共通の問題性——思惟様式における——もまた認められるのである。この問題は、マルクス主義社会—人間論の脈絡にあつては、人間本質論と社会的存在論との関係如何という理論的レベルで存在しているといつてよからう。

そして、この種の、個人と社会との関係をめぐる(古くて新しい)問題の今日における新しさは、すでに社会学のばあいのふたつの傾向がかつての単純なる“社会学主義”と“心理学主義”との対置といったレベルを超えているというようなどころにではなく、問題の解決如何が個々の理論的意識に対して、それまで安座していたところのまさしく視座の転換を迫りかねない重さと鋭さをもって登場しつつあるというところに求められよう。

そうした事情を念頭におきながら、以下小稿では、個人の主体性(それは必ずしも人間の主体性に一致しない)がいかに成立するかという方向で、まずパーソナルな理論枠組をそのひとつの反省形態においてたしかめ、ついでそこでの若干の問題性の検討をつうじて、人間の共同存在性と個人の能動性・主体性、一般に個人と社会との関係の諸側面についての前提的諸命題を提示し、もつて社会的人間論の基礎づけを試みてみたい。

- 1) 山崎達彦「大衆社会と社会意識」、細谷・八木編『現代への社会学的接近』(アカデミア出版会)所収、206ページ。なお一般に社会学の文献において、「人間」、「個人」、「社会」等の用語の関連が必ずしも分明でないが、山崎論文はそれらの概念的区別と関係とを明示しており参照されるべきである。
- 2) たとえば、庄司興吉「主体としての人間——社会の人間論序説——」浜島編『社会学講座2(社会学理論)』(東大出版会)所収。それぞれ色合いを異にしているが、田中義久や真木悠介らの仕事もそうした方向を追求するものであろう。そして、これらの努力の背後に(マルクス主義社会—人間理論との交渉は別としても)、近年の国際的な社会学批判の大きなうねりがあることについては多言を要しないだろう。
- 3) 上掲『社会学講座2』の「序論」、3～4ページ。浜島の用語法には若干の疑問があり(上記の人間、社会、個人概念連関など)、現実把握の社会学的理論枠組に必ずしも同調しえないが、そうした点を留保してなお、問題状況の適確な要約であり鋭い指摘であると思われる。なお同氏の用語法(たとえば、個人—社会ではなく人間—社会、など)はたんに概念的未整理ということではなく、そこに或る内容的含意のあることが認められるのだが、それがかえって「人間の共同存在性に超歴史的に随伴する疎外現象」といった認識を安易に導き出しかねない論理的陥穽をなしているように考えられ、首肯しえない。

〔I〕

パーソンズ的な人間—社会観の根本的な制約は、なによりもまず「労働」把握を欠くことである。そして労働—生産把握の欠如がいったいどのような影響をもたらしているかといえば、それはひとつには人間の自己実現、自己表現の観点が無いということであり、ふたつには社会的生産の視点の欠落によって社会を社会構成体という視角から具体的に捉えることができず、したがって社会変動はもとより本質的には社会構造をも分析できないということである。後者（それは社会学的「社会」概念を改めて吟味するさいの要諦である）は、それ自体一大論点をなすものであって、別に検討せざるをえないが¹⁾、前者についてみれば、パーソンズ流の行為論にあっては、その初発にたとえいかにいわゆる“主体的個人”がおかれようとも、そうした個人の能動性を本質的に可能とする根源的な力が捉えられていないところから、結局は社会システムの安定的均衡に貢献する以上の役割をもたない受動的な人間像が造形されることになるのである。パーソンズ理論の一般的検討がここでの目的であるわけではないので、従来よりこの理論体系に加えられている批判などに立ち入ることはしないが、上記の一点は小稿の主題からして見過すことのできないものである。それゆえ、この点について、そしてそこから派生する若干の主要な問題に関して、わが国の代表的パーソニアンの一人名たる富永健一の論文「社会体系分析の行為論的基礎」²⁾に即いて具体的にみるところから始めよう。パーソンズその人ではなく富永のこの論文をとりあげるのは、問題の焦点が「社会的全体の観点からする個人の行為への制御と、個人の欲求が行為を動機づける過程との両方を統一的にとらえよう」³⁾と明確にしぼられていて、まさに当面の関心に適合するものであること、および富永自身によれば、パーソンズ理論に内在する論理的難点の自覚のもとに、社会学史を貫くふたつの社会観の対立、すなわち（富永の用語での）「社会的全体論」と「社会的個人論」の真の統合をめざしたその成果であるとされるからにはほかならない（ただし、機能主義理論とシステム理論と行為理論とを結接するという富永理論の固有の文脈をフォローすること自体は、小稿の関心外にある）。

富永は、個人から出発する行為理論と全体から出発する社会体系理論とをむすびつけるという形で個人と社会の関係を媒介し、もって社会学を二分するあの傾向を結合せんとしたパーソンズの固有の貢献を学説史上かつてない大きなものとしながら、しかしそのパーソンズにおいても行為理論と社会体系理論との論理内在的接合は必ずしも果たされていないと考える。

「パーソンズは行為概念について周知の規定を与えるさいにすでに、最初からそれが“規範によって規制されている”ことを行為概念自体の構成要素のひとつにくりいれている。換言すれば、規範は個人の内部における欲求ないし動機づけ要素とまったく切り離されて位置づけられており、それは個人にとって最初から与件なのである。」⁴⁾

規範の行為論的説明がそうするように、「複数の人間がかれらの相互行為のくりかえしの中からかれら自身の欲求にもとづいて規範を〈創発的〉emergentなものしていく」⁵⁾というのならともかく、原理的に、所与として個人に内在する規範が措定されるならば、それは個人を一方向的に規定・規制するものとして現われ、個人の自発的能動性はすでにあらかじめ制約されたものとなっており、論理的には全体の決定論が成立することとなる。富永は、パーソンズ理論のこうした欠陥を「けっきょく社会体系の目標を個人の目標に関連づけて考察する努力」⁶⁾の不足によるものとする。そこから富永が構想する行為理論と社会体系論の統合の「だいたいのすじみち」は、以下の如くである。

「行為論的接近の中に社会レベルの概念がア・プリオリに入りこまないように注意しながら、同時に人間行為における欲求充足が常に個人では達成不可能であって他者の助力を必要とすることに

注目し、ここから個人行為にとっての目標とシステムにとっての目標とが両立しうる条件が生まれることを説明する。」⁷⁾

つまり、パーソンズは「主意主義的行為論」者としてのその出発にもかかわらず、行為主体を、内発的ならぬ規範のア・プリオリな介入によって挫折させてしまった。いいかえれば、あくまで個人レベルで展開されるべき行為主体を無媒介かつ安易に規範等の社会レベルに接合しようとした。したがって、第一に要求されるのは、行為における個人レベルと社会レベルとを峻別することである。だが次に、それではいかにこの両者が、すなわち個人と社会とが媒介されうるのかといえ、それは、社会を組織することなしにはたんなる生存すらおぼつかない人間にあって、個々人の側からは、かれらの生存と生活の利益のためには相互の理解と配慮とによって社会を安定的に維持しなければならず、また社会の側からは、それが安定的に維持されるためには個々人の欲求の充足を最大限に図らねばならない、というかたちでそれぞれの目標が相互的に一致するところにこそある。すなわち、一方では、「個人行為者がみずからの欲求充足にむかって動機づけられて行為するのは体系としてのパーソナリティの機能的要件〔一般にシステムの充足されるべき不可欠の条件の謂い——引用者〕を充足するためであるが、そのさいかれは、みずからの欲求充足のためにも集団や組織に依存することが不可欠であることから、自己の属する集団や組織の機能的要件の充足に無関心でいることはできない」⁸⁾が、他方、そもそも欲求充足が一人では達成できず他者が相互に欲求充足機会の提供者であることによって相互の行為が成立しかくして社会が形成されるのであるから（後述）、本来的にはどの個人にとってもその欲求充足の実現が社会体系に求められていることになる、つまり「社会体系の機能的要件は、個人行為者自身の欲求充足の実現を組み入れたものになっている必要がある」⁹⁾、というのが個人と社会との一般的関係である。ここに、個人行為とシステムのそれぞれにとっての目標が両立しうる条件が存し、かつそこから、いったんは峻別された行為における個人レベルと社会レベルとを再び連関させる論理が可能となるとされるのである。そのさい、価値や規範は、他者の意図や動機や欲求の相互的理解をつうじてみずからの自我の一部として内面化(学習)されているのであるが、そのようなものとして「創発的」なのであって、パーソンズにおけるように、個人にとっての所与としてあらかじめ前提される必要はない。

もっとも、個人と社会との間がつねに予定調和的關係にあるわけではない。そもそも行為主体の欲求ははじめから社会の機能的要件を内面化しているわけではないし、逆に欲求の充足ははじめから社会の機能的要件として組み込まれているわけではなく、したがって社会の機能的要件の充足はしばしば個人の欲求充足をおかすおそれがあり、あるいは逆に個々人の欲求充足行為が社会の機能的要件の充足をおびやかすことがあるかもしれない。こうしてコンフリクトが存在するだろうし、その解決のためになんらかの構造変動が生起することでもあろう。しかしながら、一時的局所的にはともかく、長期的本来的には、体系の不安定な状態に対して均衡回復の力が働く。というのも、個々人の欲求充足の点からいっても体系の機能的要件の充足という点からいっても、コンフリクトが長期かつ全体的に持続することは明らかに不利益だからである。「体系内の要素の布置状態(構造)が体系の目標達成にとって逆機能的である場合には、その体系内に現在の構造を変えようとする力(均衡回復の力)が作用する。」¹⁰⁾コンフリクトが存在する現状の構造変動は二通りあり、その段階でのパーソナリティ体系と社会体系との相対的な安定性の高底によって、いずれかが前面に現われる。(i)「行為者が欲求の構造を変えること」——「すなわち、かれはどのみち社会なしには生きられないことを考慮に入れて、社会の機能的要件が充足されねばならない事実を受けいれ、みずからの欲求のうちこれと衝突する部分を断念するなどして、機能的要件自体を欲求の中にとりこむ、という可能性」¹¹⁾(社会化の過程をつうじておこる変動)。(ii)「社会の機能的要件として目されて

きたものについて再検討を加え、これをコンフリクトの減少する方向に変えること」¹²⁾(たとえば、役割構造の変動や社会的資源の配分構造の変動をつうじて、機能的要件の充足を容易ならしめる、という可能性——社会発展や社会変革の過程をつうじておこる変動)。

だがしかし、そのようなばあい、個人の主体性・能動性はどのように確保されているのであろうか。富永の理論体系において、“社会変革の主体としての(諸)個人”などというものはじつは本来きわめて考えにくいのだが、そうした場面はともかくとしても、欲求充足の実現を阻まれて、しかし「どのみち社会なしには生きられないことを考慮に入れて」社会体系に同調する個人が、しかもなお主体的・能動的でありうるのだとすれば、それはいったいいかなる意味においてなのか。

富永によれば、個人の主体性・能動性は、「意識的・自覚的にみずからの行為の目標を設定してその達成のために主体的な努力をかさねる」¹³⁾という・行為主体としての人間の独自性のうちに求められなければならない。「行為概念は人間行為の目標指向性(goal-directedness)を重視する。」¹⁴⁾そのばあい肝要なことは、人間行為の目標指向性というのは「目的制御がシンボル情報とくに言語をつうじて行なわれ、かつ行為過程の選択が意識的・自覚的な主体選択としてなされるという人間行為に固有の特性をさしている」¹⁴⁾ことである。ところで目標の実現とは、「行為主体による環境的要素の一定部分についての目的的な制御を意味する」¹⁵⁾。行為主体の環境制御能力はさまざまであるが、ともかくも行為者は「実現値の目標値からの偏差が可能なかぎり最小になるように、目的的な努力を重ねるものである」。実現値と目標値をできるだけ接近させ両者の間の偏差の最小化をめざすような制御は、「結果情報に照らして行為のインプットを修正する」というサイバネティックスの意味でのフィードバックをつうじておこなわれるだろう。それゆえ、人間行為の特性としての目標指向性は、「情報論的裏づけにおいて理解されなければならない」。けだし、「人間行為の目標指向性」ということの意味をこのように解すれば、人間行為によって構成されるシステムとしての社会体系がサイバネティックス的な意味で目的的(purposive)、あるいはもっと正確に表現すれば目標追求的(goal-seeking)な性質をもっている¹⁶⁾ことがわかるわけであるが、フィードバックを基礎原理とするこの目的のないし目標追求的なメカニズムは最高次の自己制御システムであり、人間行為のシステムはまさにそのようなものにほかならないからである。こうして主体性は確保された!「すなわち、行為システムは目的的に制御されたシステムとしての特性をそなえており、しかも行為システムのそのようなメカニズムは全体(社会)が部分(個人)を動かしがたく支配することによって実現されているのではなく、主意主義的行為理論がまさしく仮定している個々人の行為のいわば自発的な努力をともなうことによって実現されているのである。」¹⁷⁾つまり、こうである。行為主体は、或る目標の実現のために環境的要素の一定部分を目的的に制御しようとする。それに成功すれば問題ないが、当面成功しないばあいにもできるだけ目標に近づくべく、目的的な努力を重ねる。そのばあい行為の結果に照らして、行為過程に修正を加えるか(やり方をかえるか)、もしくは目標そのものを変更するかのいずれかによって目標の実現を図る。こうした過程はまさしく能動的、主体的であって、全体からの規制、強制によるものではない。というのも、「個別行為主体が意志の自由をもち自律性への要求をもつ以上、全体システムからの規制や指令の履行は個別主体によって意識的・自覚的に選択される」¹⁸⁾からであり、この“選択の自由”にもとづいて、目標実現に向かったの目的制御が行なわれるからである。勿論、規範への同調を拒否することも(抽象的には)可能である(なお、また、意識的・自覚的選択のさいに、「個人は意志の自由をもつとはいえ、どのみち他者に依存せずには生活できないのである」¹⁹⁾からという観点からの、規範・制度形成の“創発性”がはたらいっていることも明らかである)。

富永の「社会体系分析の行為論的基礎」の論旨は、粗筋においてほぼ以上の如きものと思われる。

パーソンズ理論のつまずきの石であったところのア・プリオリに前提された「規範」は、人間存在の相互性一般の理解＝学習をつうじて内面化され（＝創発的なものとしての規範、制度等々）、また個人と社会とは、行為システムとしてのそれぞれの目標的一致という点で関連づけられ調停されるとともに、両者を一貫する目的的な自己制御システムという性格の上に意識的・能動的主体が据えられたのである。

- 1) さしあたり次のようにいっておいてよいだろう。すなわち、社会は人間たちのとりむすぶ諸関係・諸関連の総体であるが、そうした諸関係・諸関連のそれぞれあるいは一定のレベルが並置的、自立的、相互外在的にあるのではなく、人間活動の基礎としての広義の生産的実践をめぐる諸関係を基軸として編成されており、また社会変動の根拠もまずもってそこにもとめられなければならない、とするのが社会を第一義的に社会構成体として具体化する立場であり、ソシオロジーとしての社会学の諸「社会」概念との決定的差異をなす点である。
- 2) 富永健一「社会体系分析の行為論的基礎」、青井編『社会学講座1（理論社会学）』（東大出版会）所収。
- 3) 同上、134ページ。4) 同上、90ページ。5) 同上。
- 6) 同上、91ページ。7) 同上。8) 同上、101ページ。
- 9) 同上。10) 同上、102ページ。11) 同上、103ページ。12) 同上。13) 同上、114ページ。14) 同上、92ページ。15) 同上、107ページ。16) 同上、108ページ。17) 同上、109ページ。18) 同上、115ページ。19) 同上、110ページ。

〔II〕

富永理論の一般的性格、情報理論、制御理論の導入の意義、もっぱら社会秩序形成にどう収斂させるかというところに焦点をあわせて構想された“主体性”論、宿命的ともいえよう殆ど想像を絶するばかりのシステム安定への拝跪、等々への多少とも立ち入った吟味の誘惑を禁じえないが、ここではそれらのすべてを割愛して、ただ2、3の論点にかぎって、すなわち富永が人間に固有の特性として摘出したふたつの点、つまり欲求の範囲が動物に比していちぢるしく広いこと、および意識的・自覚的な目標指向性をもっていること、という人間特性のそれ自体は正しい指摘にかかわって、検討してみる。パーソンズ流の社会学基礎理論における労働－生産把握の欠如ということがもたらす意味も、これらの点に即して明らかになる筈である。

富永によれば、「人間における脳の発達と直立歩行の事実が人間と人間以外とのあいだに大きな質的断絶をつくり出している事実」¹⁾は、欲求の範囲が動物に比していちぢるしく広いことおよび意識的・自覚的な目標指向性をもっていること、という二点において人間に固有の特性をなすものであった。しかしながら、「脳の発達と直立歩行の事実」と人間の特性をなすこの二点とのあいだには、明らかに、動物一般と「脳の発達と直立歩行の事実」とのあいだに横たわる空隙に劣らぬ大きな空隙がある。

富永は「欲求の種類」を次のように分類している。(i) 食物摂取の欲求や疲労回復の欲求などのような個体維持の欲求、(ii) 性的欲求や育児の欲求のような種族維持の欲求、(iii) 他者からの社会的承認や尊重や威信を求める欲求、支配、依存、従属などに関する欲求、のような社会的欲求、(iv) 学問を身につけたい、技術や技能を修得したい、職業的に成功したい、組織の中で昇進したい、などのような文化的・制度的に設定された目標実現の欲求²⁾。

人間の欲求が、動物におけるように直接的な生存および生殖等に限られるものでなく、広い範囲の社会的・文化的領域におけるものであること、そしてそのことが人間行為の特性を基礎づけるも

のとして重視されなければならないということ、こうしたことの指摘自体は正しい、しかしながらすぐ気をつくことは、まず社会的・文化的な欲求の内容が甚だランダムであり、常識的に経験主義的な拾い集めの域を出るものではないことである。そこからさらに、富永が数えあげる欲求の内容の意外な人間学的貧しさにも気付かされる。富永における欲求の分類は、あたかも“効用”であるかぎり価値である（そのかぎりでは真に人間的欲求に導かれた行為もまた、その当の行為者にとっては効用あるものとして価値であるにちがいないが）という観点からなされたもののようであり、それを越える「人間的欲求」、「人間的価値」などの存在は視野に入っていない。すべてこれらのことは、そもそも富永にあっては、社会的・文化的欲求がなぜ、どのように成立したのかということがなんら顧みられず、経験的に所与のもの、既存のものとして前提されていることから発している。最も重要なことは、人間の社会的・文化的欲求が、労働－生産のなかで成立したし、そのなかでこそたえず広がるとともに、また新しい欲求がかたちづくられてきているということである。この連関には以下のような諸側面が見られよう³⁾。

(1) 人間の欲求もまた生産されるものである。人間は、生存を全うするためには労働（生産）という活動をおこなわなければならない。そして、固有に人間的な労働は合目的・意識的活動であり、道具（→労働手段）の使用によって欲求の充足をめざすという特質を具えた過程であって、そうした過程の積み上げをつうじて既存の対象にあきたらない、新たなる対象を求める欲求が生じてくる。歴史的に、生産の結果として新しい欲求が生まれるとともに逆にそうした欲求の実現をめざす努力のなかから新しい生産が実を結ぶ、という生産と欲求との相互媒介的發展がみられる。現にある欲求ということではなく、労働（生産）活動をつうじて欲求が新しくかたちづくられてくるという人間的活動の特殊性のなかから、たんなる生存と種との維持の欲求にとどまらない人間に独自の欲求が、つまり社会的・文化的欲求が形成された⁴⁾。そのようなものとして、社会的・文化的欲求はまた、社会発展の原動力のひとつである。

(2) ところで、人間に固有の欲求が労働（生産）から生み出されたというばあい、道具ないし労働手段が使用される労働過程において、そうした媒介的手段に向けられた欲求（またはその手段の生産）は直接的なものではない。つまり労働過程の経過中は、直接的な欲求（食べる、飲む等）が停止されている。勿論人間は、止むをえぬ必要からあるいは（もっと進んだ段階では）より大きな果実を手中にするために直接的欲求の一時的停止をおこなうのであるが、そのことはしかし、動物一般とはちがって人間が直接的欲求のくびきから解放されるようになる、ということの意味する。いいかえれば、自然に埋没せざるをえない直接的な制約性から解放放たれるとき、任意の方向にむかう広範な欲求が成立しうるということである。こうして、労働過程という創造的活動を原型とし、かつ直接的な欲求から自由となることによって、社会的・文化的欲求の発展のための一般的基礎が築かれる。音楽に対する、絵画に対する等の欲求（および能力）もこの土壤に成育したものにほかならない。

(3) これらのことはまた、人間における欲求と能力とが双生の子であることを物語っている。もはや明らかかなように、人間が或る欲求を充足することができるのはその欲求対象を作りだすことのできる能力の開発によってであり、逆にまた或る種の欲求の充足をめざす努力のなかではじめて新しい能力が形成されるのであって、それはともども人間の本質的力をなしている。そして、欲求と能力とのこの相互形成的關係においてやがて、自己の能力を発揮すること自体が特殊な欲求として現われるであろう。それは、あるいは自己の諸力を縦横に駆使して労働する喜びであり、また創造する喜びなどであり、そうした自己活動に向けられた欲求である。そして或る段階では、全き自己実現の欲求が、もしくは他者との真に人間的な共同といった欲求が、そうした欲求の充足をめ

ざす能力を要求し育てるという形で、主体的個人の能動性の一契機をなすことでもあろう。

(4) 上記のことからはさらに、生存の欲求をミニマムとし、(万人の)自己実現という欲求と労働—創造的生活の総体としての人間の価値の一大系の歴史的成立のさまがみてとれよう。ここに欲求の価値論的位置づけが可能となるのであり、そうした地点からは、人間の欲求が歴史的にとる非人間的諸形態(当該歴史社会の諸個人のいずれかの集団にとっての“効用”として、いかに“価値”あるものであろうとも)をまさに非人間的なものとして批判しうる根拠が確保されるであろう。近代のブルジョア社会の利己的な個人にあってさえ、その生活原理としての排他的な欲求充足、利益の追求がこの社会のパラドキシカルな構造によって、まさしく自己以外の人間とその活動の成果とによって実現されるのであってみれば、いいかえれば排他的な我欲でありながらその充足のためには他者を欲求せねばならないというのがこの社会の現実の基底であってみれば、利己的な個人を構成原理とすることのない新しい共同体においては、最も人間的な欲求、したがって最も価値ある欲求として、人間相互の人間の結合を求める欲求もまた当然にその最大のひろがりと深さにおいて成立するだろう。そうした欲求は、まさしく歴史をつうじて準備され育まれるものにほかならない。マルクスは、「ゆたかな人間とゆたかな人間的欲求」についてたとえばこう語っている。「どの程度まで人間の欲求が人間的欲求となったか、したがってどの程度まで他の人間が人間として欲求されるようになったか、どの程度まで人間がそのもっとも個別的な現存において同時に共同的存在(Gemeinwesen)であるか……。」⁶⁾「ゆたかな人間は、同時に人間的な生命発現の総体を必要としている人間である。すなわち、自分自身の実現ということが内的必然性として、必須のもの(Not)として彼のうちに存する人間である。人間の富だけでなく、欠乏もまた——社会主義を前提するならば——人間的な、それゆえ社会的な意義をひとしく獲得するのである。欠乏は、人間にとって最大の富である他の人間を、欲求として感じさせる受動的な紐帯である。」⁶⁾

労働(生産)を基軸とし、歴史のなかで広がり豊かになってきた人間の欲求は、こうして、やがて他者との共同における全面的な自己実現にも向かうものとして、まことに無際限である。そこからひるがえって、今一度富永の欲求理解に関していえば、なによりもまず次の点を明らかにしておくべきだろう。それは、目的的な自己制御によって断念したり、あるいはまた規範や制度に同調したりすることのできない種類の欲求もまた存在するし、特定の社会システムへの同調を自己自身に許さない欲求(勿論当該社会システムへの一定の同調行動をとることなしには人間は生きていくことができない、しかしそうした中で、そのような同調行動をとりながらも、しかもみずからの欲求の多少とも全面的な実現のためにそのシステムそのものを否定し変革したい、という類いの欲求)、さらにいえば、当該社会システムは真の人間的欲求を満たさない、という判断のもとに人間的欲求の実現を求める欲求などが存在するということである。いいかえれば、役割を演じる(演じざるをえない)と共に、それを否定しようとする欲求があり、それが実は人間の人格的存在の内実をなすものである、ということである。主体性ということが、対象に対する一定の自律性、支配・制御の確保ということにあるとすれば、ここにこそ社会変動のまさに主体的な力を認めることができるのであり、一般に社会体系論に社会変動論が無いということの深刻な意味の半面(すなわち変革の主体的条件に関わるところの)はこの点に求められるのでなければならない。

富永の欲求理解は、このように、人間的・歴史的省察を欠く少なからず内容貧しいものであるが、それは直接には、人間における労働—生産の意義が捉えられないところから帰結したものであった。富永の「欲求の種類」の平板な寄せ集めもこうして現状を、すなわちこのばあい資本主義的現代社会を無批判的に肯定ないし前提するところから出来上がったものであって、欲求のそうした歴史的諸形態(富永の社会的・文化的欲求の諸項目は一見して明らかなブルジョア社会的色香に満ちている)

がまさしく歴史的に相対的なものとして、歴史的発展における人間の欲求の無際限な展開という観点から捉え直されることもなかったのである。したがってまた、富永の欲求論は、ただ、「人間に関してパーソナリティの構成諸因子や価値観の構成諸因子などが重要な実証的研究の主題になる」⁸⁾！というほどのパーソナリティ研究の重要性の指摘にとどまるものであって、人間の欲求における意識的・自覚的な目標指向性の全的意義の把握、すなわち人間的主体性の根底的把握に結びつかないものである。かくして、欲求理解における同様のことが、この意識的・自覚的な目標指向性についての富永の理解に関してもいえる。

社会体系論の行為論的基礎づけをめざす富永の最大の論点は、「他者の意図や動機を理解し、価値や規範をみずからの自我の一面として内面化する」⁹⁾という過程によって成立する相互関係としての社会一個人把握にあたって、そうした内面化＝社会化が（パーソンズ理論の難点でもあったように）与件的・外在的ではなく内面的・自発的である根拠が、人間行為に固有の特質としての・主体選択的な「意識的・自覚的な目標指向性」に求められていることであった。この点はすでにみた。われわれもまた人間行為の意識性、合目的性格を重視するし、それこそが動物と人間との「生命活動の質的相違」をなすものとも考える。しかしその意味は、人間の労働に固有の、この「意識的」なしたがって「自由」などという内面的特質が、生産力の発展を必然とする主体的契機として歴史の発展の主体的動因をなしてきたし、またそうした生産力の真の主体として人間の本質的諸力の造形にあづかってきたという、歴史＝人間形成的性格に即してである。そこには、社会体系の目標と一致すべく自発的な目的制御としての「意識的・自覚的な目標指向性」といった貧弱な内容からはおそらく測り知れないだろう、能動的行為の開放された領野が広がっている。つまり、こうである。自然変革の行為としての労働（生産）は、同時に意識的活動である。身体的行為の意識的制御（身体的行為を自然法則に従わせることおよび一定の目的に従わせること）という点において、そして現実の生産活動に先立つ観念的生産という点において、労働（生産）はひとつの目的意識的活動である。労働という活動をとおして人間は意識をもつようになったのであり、一般に人間の精神的存在性という性格は、この労働（生産）において作り出され、実現し、発達するのである（発生史的にばかりでなく、日々くりかえされている現実としても）。ところで、労働の内面的特質としての目的意識性は、歴史的に生産力の発展の主体的契機そのものである。勿論労働における意識の役割が考えられるばあいには、同時にそうした意識が現実化される客観的諸条件もまた前提されていないなければならない（観念的生産がいつでも実際に現実化するわけではなく、それぞれの歴史的段階における生産手段等の客観的諸条件が現実の生産を制約する）。しかし、まさにそうした生産力の客観的契機との現実的媒介において、目的意識的に能動的な主体的な力が生産力の発展に向けて働くのであり、現在の到達段階を不断に越えていくのである。意識的・自覚的な目標指向性とは、この意味で、歴史＝社会の発展そのものを貫く主体的な運動原理、すなわち歴史発展の根本契機であって、そもそも一社会体系の安定的均衡にあずかるべく位置に押しとどめられるものではない。労働はその内面的特質において“人間の創造的生活そのものを造形した”のであった。

こうしてみると、富永においてはかれが人間に固有の特性として挙げたふたつの点のいずれもが、じつはその十分な意義においては捉えられていないのであった。そしてすでに明らかなように、それは、人間における労働（生産）の意味の把握が欠如しているところから結果したものであった。このことは当然にも、富永の社会形成－社会本質の規定と関連する。この点は、これまでのところあえて捨象してきた問題であった。

富永は社会について次のようにいう。「人びとが社会を形成するのは、かれらが相互行為（interaction）しあうことをつうじて他者とのあいだに一定の関係をとりむすぶからである。」¹⁰⁾相互行為

(相互認知, 相互的コミュニケーション, 相互交換等)とはまさに相互的すなわち両方向的な過程(相互連関, 相互制約)であり, この過程をつつずる行為の一定の多少とも持続的な集合(行為の組織化・構造化・パターン化等)ができあがるとき, 社会関係および社会集団が形成される。「人びとがこのように, 相互行為しあい集団や組織をつくりかくして〈社会〉を形成することなしには生活していけないことは, われわれが経験的に知っていることである。」¹¹⁾然り, 社会なしには人間のたんなる生存すらおぼつかないことは, まさしく経験的事実である。「しかし人はいったいなぜ相互行為しあい社会をつくるのであろうか。」ひとはあたかも「群居本能」によって社会を形成するのではなく, また相互行為そのものを求める欲求が人びとをして社会を組織せしめるということでもないとすれば, その解答はいわば「欲求充足の相互交換」に求められなければならないだろう。すなわち, 「その行為を動機づけるような内部条件が行為主体のがわにある」ばあいにはじめて「人がなぜそのような行為をするのか」という問い¹²⁾に答えられるとすれば, 行為を動機づけるような主体の内部条件としての「欲求」(need)の充足のためには, 人びとは互いに欲求充足の機会の提供者たらねばならないというところに, 社会の成立の根拠がある。自明のことながら, 人間はきわめて多くの欲求をもっており, それらのうち他者の助力を全く得ることなしに充足されうる欲求は, じつは殆ど無きに等しい——。

この説明が社会形成の, 社会本質の原理的な説明になっていないことは, 人間に固有な広範囲の社会的・文化的欲求はいったいいかにして存在するようになったのかというすでにおこなった問いにおいて, もはや明らかである。かくして今や, 人間における社会形成の問題に, 社会本質の積極的解明に転ずべき地点にさしかかっている。以下主としてG. マールクシュの議論¹³⁾に依りながら, 社会的人間論の基礎的諸命題の若干を要約的に示してみる。

1) 富永上掲論文, 104 ページ。 2) 同上, 97 ページ。

3) 以下の論述は, György Márkus ; *Marxismus und Anthropologie* (高橋・今村・良知識, 河出書房新社) に負うところが多い。

4) そのさい, 人間の社会的・文化的欲求の発展が, 人間の生物学的, 本能的な欲求にも変化を与えずにはおかなかったことおよびその意義について, たとえば Karl Marx ; *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*, Europäische Verlagsanstalt, S. 13 などを参照されたい。

5) K. Marx-F. Engels ; *Werke, Ergänzungsband erster Teil*, Dietz Verlag, S. 535. 邦訳『経済学・哲学草稿』(岩波文庫), 130 ページ。

6) *Ibid.*, S. 544. 上掲邦訳, 144 ページ。

7) なおまた, ここで詳論するいとまはないが, 人間の行為に先立つ欲求の存在ということが必ずしも行為主体の能動性・主体性を保証しはしないということを, 欲求の歴史性(或る欲求はすでに歴史的に媒介されている)という脈絡で確認しておく必要がある。

8) 富永上掲論文, 106 ページ。 9) 同上, 92 ページ。 10) 同上, 95 ページ。 11) 同上。 12) 同上。 13) 註3)の文献。

〔III〕

1. 社会は, その本質的規定性においては, 畑孝一の用語を借りるなら, たんに「生活共同体」であるばかりでなく, すぐれて「生産共同体」である¹⁾。しかも, 本源的な社会形成という点においてばかりでなく, 特定の歴史的形態における社会構造を根本的に制約するものとしてもまた, 生産共同体という性格が社会の本質をなすのである。すなわち, まず, 人間たちは生きるためにはたん

に共同する（それは動物もまたおこなう）ばかりでなく、自然の変革としての労働—生産に従事しなければならない。しかしながら、人間たちはおよそいかなるばあいにも、この生産を個々人の孤立した労働によってとりおこなうことはできない（けだし、人間という類の生理学的・具体的特性等からして、ものをつくりあげる生産は個人にはできないことだから）。生産は、まさしく協働において——この協働が直接的であるか間接的であるか（分業）を問わず——達成されるのである。つぎに、社会はこのように直接的な生産過程における協働関係として形成されるが、やがて生産のためのその関係の歴史的発展の中で分配、交換等の領域が相対的に自立化してき、さらに政治的、法的な諸関係とその歴史的諸制度等が成立する。そうした諸関係の総体が現実の社会をなすのであるが、この社会の歴史的諸形態のそれぞれを画するものが、他の諸関係を多かれ少なかれ基本的に制約し条件づける基底的关系としての生産（ここでは過程の一総体をなす流通、交換、消費等を含むものとして広義にとらえておこう）共同体の歴史的現存様式である。生産を基礎とする諸関係、諸関連の総和であるところに、じつは、社会の歴史的発展ということの基盤がある。社会のこのような把握から第一に、「社会は個人からなりたっているのではなくて、これら個人がたがいにかわりあっている諸関連、諸関係の総和である」²⁾ことが理解される。疑いもなく諸個人を構成員とし諸個人の行為によって形成される社会は、しかしたんなる諸個人の集合、機械的総和として成り立っているのではなく、生産のために諸個人が相互にかかわらなければならないということを基礎に、そうした生産共同体の再生産のために組織された諸関係や諸関連、諸制度や諸組織、種々の規範等々をも実体的内容に含めて成立しているのであって、諸個人に還元されうようなものでもない。第二に、このように、諸個人の存在と行為なしには存立しえないが、同時にそうした行為をつうじて、生産を基礎とする客観的な諸関係・諸関連とその歴史的諸転態が生じ、かくして社会の法則的運動が成立する。そしてそこから、諸個人の歴史的・社会的被規定性とそのもとの対象への能動的なかわり、という問題連関が発生する。いいかえれば、人類史の発展の一定の時期から後は、諸個人の自然へのかかわりと諸個人間の相互関係は、決して自然的・直接的ではなく、それぞれの歴史的時代の発展にある物質的生産と精神的生産、そしてそれとともに展開する諸個人間の包括的な「交通」という諸条件を前提として成立している。

2. そのばあいしかし、諸個人を規定する社会的歴史的諸条件は、原理的にいって、諸個人の外部に存し諸個人に対してもつばら抑圧的にのみ現われるようなものではない。無論あたかも「社会」があるいは一定の社会的諸関係が多数の諸個人に対し抑圧的対抗的にのみ現われるという現象は歴史的に現存する——疎外、物象化（ここで「社会」がというのは明らかに仮象であるが）、しかしそうした現われは、社会という人間の存在様式そのものに本質的、必然的であるのではない。人間は、まず自然的、生物学的存在としてあたかも「受苦的」であった。そしてそれゆえに対象に「情熱的」に、エネルギーに迫ろうとするものであった。受動的な存在から能動的な存在への人間の存在様式のこうした転換を歴史的、現実的に可能にするものこそ、目的意識的ではたがって自由な、という内面的特質をむつ労働であった。そして、まさに実践の原基形態としての労働によって形づくられるそうした人間の存在論に照応して、歴史的具体的なレベルにおいても、諸個人は、さしあたりは所与の諸関係に依存しなければならないが、同時に所与の諸関係、歴史的・社会的諸条件をかかれら自身のものとして領有することによってそれぞれに個別的、個性的な発展をとげるといふ社会的あり方をしていっている。つまりこうである。

諸個人は物質的・対象的な存在であり、したがってかれらの欲求をみたし生活をたてるためには、かれらから独立して存在する物質的・社会的な諸条件に依存しなければならない。しかし、労働と

いう活動によってやがて全地上の再生産にむかうことをも可能にするような・固有に人間的な本質力を獲得してきた諸個人にとって、外的な諸条件、物質的・精神的生産にとっての一般的環境はかれらに対して拘束的にのみ作用するところのたんなる所与ではなく、同時にかれらの活動力によって変更され我がものとされ、かれらの新しい能力、欲求、生活の様式等々となるような現実的対象である。つまり、諸個人に現前するそれぞれの歴史的社会的物質的・社会的諸前提とは、なによりもまずそこに過去の諸世代の、そして同世代の諸個人の能力、欲求、「交通」諸形態などが対象化された現実であって、諸個人はそれらを我がものとして獲得することによってはじめてよく生活をたてうるのであり、以前よりも広く深い諸資質、より強い諸力を育てて当該歴史社会の人間的内容を形成するのである。このような意味において社会は現実の具体的な諸個人が現実におりなす諸関係の全体、すなわち「人間の世界」であって、本質的かつ本来的には、諸個人に対する桎梏であるのではなく、むしろそこから諸個人が・総体的な社会的諸経験の領有(Aneignung)によって自分たち自身をより人間的に形成すべき・大地である。

* こうした観点から次のことをいいうる。(1) 歴史は、その中で諸個人がみずからの社会的本質を積極的に領有していく過程、すなわちあるいは生産諸用具、科学、文化等に定着されているところの、あるいは法的・政治的、価値的・美的等の形での多様な「交通」諸様式における生活諸経験を獲得していく過程である。(2) 歴史の発展の尺度は、たんに技術的進歩(「技術的な意味に解された生産諸力の発展」ということではなく、本来この進歩もまたそこに帰属すべき「人間学的」意味での進歩、つまり全社会によって発展させられるもろもろの能力、欲求、交通形態、知識といったもの間断なき拡がり³⁾と深まり³⁾ということに求められなくてはならない。(3) そして、この点に歴史発展の内実がみられるならば、具体的個人的な人間生活のなかでそうした人間本質がどの程度まで実現されているかという意識において、「人間の価値」という概念が、たんなる効用の意味においてでなく、また超越的な価値秩序にもとづいてでもなく、現実的・歴史内在的であるとともに普遍的・客観的なものとして成立する。この「価値」はまた、目標あるいは理念、理想として諸個人の行為を導きもする。(4) かくして、包括的な社会的諸経験、諸関係の領有にもとづく人間本質の実現が、人間存在の對象一能動的連関の歴史的累積をつうじて可能になっていくというところに、客観的な「進歩」が、したがってまた「価値」が存在する。

3. ところでしかし、上述のことは、いいかえれば諸個人と社会との本質的同一性は、さしあたり歴史の全体に関して、あるいはまた社会の全体に関してはじめていいうることである。「一定の歴史的局面においては、そして一定の階級にとっては——しかも疎遠化が普遍妥当の合法性を帯びた領域内では——社会的諸条件やこれによって決定される特定の生活形態は、個人にとっては外的な制限として、彼のパーソナリティの発現を抑止し歪める疎遠な威力として現われる。」⁴⁾一方で、疎外の一一般化のもとで諸個人は自己実現の活動としての労働を否定され、したがってまたかれらの活動の成果の領有・享受を阻止され、それらによって社会的な・意識的にして自由な存在としての自分たちの類の本質をうばわれるとともに敵対的な人間関係・分裂した社会関係の中に押し込まれている。そこでは、諸個人の生活と活動がかれらの自己活動としてあらわれず、かれらの自由の実現、かれらの個性の力の能動的な実現としてはあらわれない。社会全体としては高度に発展した全般的な生産諸力、全面的な発達をげた「交通」とそこでの社会的諸経験、普遍的な諸欲求、諸力能、諸享受等々の一大体系が形成されながら、各個人におけるものとしてはそれらは偶然的で一面的なものとしてしか現われないという連関が、すなわち「人類の歴史的発展が個々人の発展とは別々の道を歩むという」⁵⁾不一致が、そこにはある。他方しかし、疎外の時代においても個々人の諸欲求や諸能力が全面的に阻止されているわけではない。たとえ一面的ではあれ、また少なからず制約され歪められた形であるにせよ、各個人の諸力の発展がみられる。それは、全社会的な生産諸力の発達

に相即する人間的諸能力と諸欲求、「交通」や諸観念等の普遍化という客観的過程の論理に裏打ちされてのことであるが、そうして獲得された新しい力と性格、意識が、諸個人に自分たちの置かれている状況を自覚させ、社会的人間的権利の主張等々から社会状態の変革へと向かわしめることになるのである。

疎外とその克服というちょうどこの連関に、「個人と社会」問題が成立する。社会の基底的关系たる生産諸関係における疎外にもとづいて、疎外関係が形成され、そしてそれらは日常意識の物神化、虚偽意識としてのイデオロギー等意識の領域における物象化のヴェールをまとうことによって完成される。そこではアトム的に分断された諸個人に対して、社会的諸関連が威力として、かれらの意のままになしえない敵対的強力として現われる。そのさいしかし、疎外が疎外として意識されることなしには「個人と社会」問題は成立しない。契約による社会形成（自然法論）というには社会の重圧があまりに大きく、全体の有機的部分（社会有機体論）としてはどうい個人がおさまりきれない、そういう歴史的地平に「個人と社会」問題は生じたのである。かくして、「個人と社会」問題は、すぐれて近代に、すなわち「個人」の成立後に、したがって人間の疎外の普遍化の時代に成立したのである。

* 個人概念は生物学的な意味での個体の概念と同じではない（肉体的、生物学的、心理学的等の個体的差異は未だ個人の成立を意味しはしない）。社会的全体に対する相対的自律性が成立しているばあいにはじめて個人の形成を考慮することができるが、そのようなものとして個人とはすぐれて歴史的な存在であって、象徴的に18世紀の産物といわれるべきものである。すなわち人間は、現実世界との対象一能動のかかわりのもとで、歴史過程をとおし社会のなかで、近代において、社会の相対化と相即的に、相対的に自律的、自立的な存在として個別化された。⁶⁾

4. いま少し敷衍しよう。「個人と社会」問題は一定の歴史的状況において成立したものであるが、個人—社会の関連それ自体は、「生活共同体」であるとともにすぐれて「生産共同体」であるという人間社会の本源性からいっても、また普遍的に発達した「交通」を我がものとして領有することによってはじめて全面的な自己活動が可能となる（社会的個人の実現）という人間社会の目標性（すでに述べた意味での）からいっても、本質的に統一的な過程である（将来に向けての「個人と社会」問題の解決の展望）。しかしそうした統一的な過程は、歴史的にはむしろ矛盾した発展過程として現われ、社会の実在的分裂がひいては諸個人に対する「社会」の抑圧的自立・敵対として現象する。この疎外—物象化の客観的過程は、だが同時に諸個人の個人としての自立化を促進する過程でもあって、そこから社会的全体に対する自己の相対的自律性が各個人に意識され、ここに「個人—社会」問題が成立する⁷⁾。そしてそこで問いが社会的全体に対して個人は何者であり得、何をなし得るのか、いかえれば個人は自己の運命を支配し得るのかということであるとすれば、すでに述べた社会と個人との対象一能動のかかわりは、あらためてこのようにいいよう。

「諸個人はいつも自己から出発した。といっても、当然のことながら彼らの所与の歴史的諸条件および諸関係の枠内での自己からであって、イデオログたちの念頭にある〈純粹な〉個人から出発したのではない。」⁸⁾

そのばあい個人は、かれの“出発”やかれが行為しうる範囲や様式等において歴史的・社会的に「決定」されているが、しかしまた、そうした諸前提、諸条件との能動のかかわりの中にある諸個人の行為や能力や個性等が歴史的限界という大枠以上に決定されているのではない。今少しいえば、社会的存在としての特定の一時期の個人は、一定の発展段階にある歴史が到達した人間たちの諸力、

諸欲求、交通の範囲、知識等を前提としている。それらは、諸個人の階級状態も含めて、当該世代全体の到達地点であり、個々人にとってはかれがその中で運動する空間、かれの自己形成の諸可能性の全体をあらわしており、それを越えることはできないという意味でかれにとっての制限をなしている。一般に、個人における歴史的・社会的被決定性の意味はこの謂いにほかならず、それ以上に、個々人の具体的なあり方や個性がいくつかの社会的決定から必然的に帰結されるといった類いのことを意味するのでは毛頭ない、かくして最後に、諸個人ないし個人の主体性ということの意味が考えられなければならない。ここでは要点をのみ示して、まとめにかえておこう。

- 1) 畑孝一「市民社会克服の社会学」(細谷他編『講座・社会学史1 社会学の成立』, 人間の科学社, 所収) 参照。この用語は 281 ページ以下。なおまた、同「マルクス主義を考える」上・下(『社会科学の方法』, 40号, 44号, お茶の水書房, 所収) 参照。畑氏のこれらの論稿は、マルクス主義の人間-社会理解の根本問題をいわばオーソドックスな立場からギリギリのところまで考え抜いた労作であり、その理解への賛否にかかわらず参照されるべきである。
- 2) Grundrisse, S. 176. 邦訳第二分冊, 186 ページ。
- 3) マールクシュ上掲書, 61 ページ。4) 同上, 33 ページ。5) 同上, 69 ページ。
- 6) 近代における個人の成立、とくにその客観的論理と「意識の普遍化」については、さしあたり拙稿「人格と社会」(北大哲学会『哲学』第 14 号所収) を参照されたい。
- 7) そして、疎外・物象化を克服して社会的諸関連・諸過程が諸個人の意識的支配・制御下におかれるとき、「個人と社会」という対立は溶解する。
- 8) MEW. Bde. 3. S. 75. 邦訳合同新書版, 138 ページ。

まとめにかえて

「主体」概念が、「そのうちに自己運動=自己再生産の契機を内蔵した動的な概念」¹⁾であるとするならば、社会の主体は、むしろ現実的で具体的な諸個人の現実的な諸関連の全体としての社会それ自体であって、個々人がただちに主体たりうるのではない。いいかえれば、人間は個人であることによって、あるいは欲求しそれにもとづいて行為する者であることによって自動的に主体たりうるのではない。そうではなくて、個人が社会的全体に対して相対的な自律性を獲得し、普遍的な社会的諸経験を領有することによってかえって社会的諸関連を自らの支配と制御のもとにおき、かくして共同であるとともに個人的個性的な主体として自立しうるのは、歴史的な過程をつうじてのことである。すなわち、社会的個人における普遍的な生産と交通が真に社会化=個人化として、個人的主体の確立を可能とする。歴史の歩みはいわば、そうした主体形成へ向かっての・対象に対する一定の自律性の確保の過程であり、それは次のような諸契機の総体として現存している。すなわち、主体的個人の能動性とは、(i) 基底的には、歴史的遺産としての人間の諸力の行使による(自然および社会の) 現実的对象への積極的ふるまい(Verhalten)として、(ii) 個人形成史的には(いわば個体発生的には)、かれの前に累積するそうした歴史的人間諸力の獲得として、(iii) そうした対象への積極的なかわりや対象の領有にもとづくところの、全き自己実現の欲求、そしてまた共同の欲求(能力)としてあらわれる人間的結合の実現という欲求として、(iv) 現実に存在する諸々の可能性からの或る特定の行為の選択・決断という主体的自由として、(v) そうした選択、決断における主体の人格的統一性を導くところの、価値・目標設定における主体性の発揮(人間的価値という理念的照射にこたえる能動性)、等々として現われる。

それら諸契機の意義と諸側面の詳細な検討は別の機会をまたねばならないが、おおよそ以上によって、個人と社会との一般的関係、「個人と社会」問題の性格、人間の社会的存在性の意味、そして人間の社会化＝個人化（人間の自己実現）、主体的個人の成立等に関しての一般的諸命題を提示しえたかに思われる。それらは、当面最も一般的なレベルに限られた、そして未だ暫定的で必ずしも網羅的ではない考察にしかすぎないが、問題把握の理論的枠組の設定に大過ないとすれば、これを基礎として、社会的人間論を、欲求のレベル、パーソナリティのレベル、疎外論のレベル、集団論・階級論のレベル等で具体的に展開していくことが次の課題となるであろう。

- 1) 中川弘「唯物論的歴史観の形成と《パリ時代》のマルクス」(福島大経済学会『商学論集』第40巻第2号所収), 21ページ, また33ページ,

(本学助教授・岩見沢分校)